

国語科における音読授業づくり

～子どもたちのこだわりの音読を通して～

中村 正雄

国語科の学習において声に出して読む活動は機会も多く、特に低学年では楽しみながら取り組むことができる。子どもたちが「自分だったらこういう風に音読する」「もっと音読したい」と思う気持ちを大切にしていけることが重要である。本研究では、2学年国語科「お手紙」を3つのこだわりを通して取り組んでいく。子どもたちが物語を読んで感じたことにこだわりをもって音読していくことで、考えを深めていくことや楽しみながらより多くの物語に触れることが出来るのではないかと考え研究した。

キーワード：音読、お手紙、アーノルド＝ローベル、並行読書、単元を貫く言語活動、こだわり

1. 研究目的

本校の研究主題「問い続け学び続ける子どもたち」に迫っていけるように子どもたち一人一人をみとりながら学習を進めていく。子どもたちが学習課題に興味をもち、友だちと意見を交流する中で新しい見方や国語科教材のおもしろさに気付いていけるように単元を貫く言語活動を位置付けることにした。本研究では、物語の「こだわり」（本学級では選りすぐりをこだわりと呼ぶ）を交流し合うことにより、アーノルド＝ローベル作品を十分に味わえるようにした。子どもたちが物語を読んで選りすぐったところを声に出すことで物語のおもしろさを表現し、音読の楽しさにも触れ、多読にもつながると考えた。

2. 研究方法

本研究では、2学年国語科「お手紙」の実践について記述する。

「お手紙」とは手紙がきつとこないだろうと悲観的になっているがまくん、友達であるがまくんのためにお手紙を出して励まそうとするかえるくんの温かい物語である。低学年の子にとっては登場人物が身近な生き物であり、物語を通して友達について思いを巡らすことが出来る教材である。子どもたちがこだわって音読したいところを「こだわりポイント」として授業の中で交流する。①物語の中でなぜそこを選んだのか②選んだこだわりポイントをどう音読するのかということに焦点を当てながら授業を進めていく。

2. 1. 付けたい力の明確化

学習指導要領の指導事項に沿いながら子どもたちをみとり、発達段階に応じた指導を設定した。自分のクラスでは、毎日の取り組みもあり音読への興味が高い。「お手紙」の学習を通して自分が1番好きなアーノルド＝ローベル作品を自分なりにこだわって音読するた

めに単元の学習目標として次のように設定した。

◎「がまくんとかえるくん」シリーズからお気に入りの物語を選び、場面の様子や登場人物の様子が表れるようにこだわりをもって音読することができる。

○「がまくんとかえるくん」の物語の様子について豊かに想像を広げながら読むことができる。

2. 2. 単元を貫く言語活動

単元目標を達成するため言語活動として「こだわりのお話を音読する」という活動を位置付け学習していくことにした。そのために「お手紙」を通してがまくんやかえるくんの心情に焦点を当てながら音読していくようにした。

2. 3. 単元計画

付けたい力を軸にしながら言語活動を考え、「お手紙」の単元計画として以下のように設定した。

第1次 単元の見直しをもつ。

- ① 教師が「お手紙」を音読し、音読への興味をもたせる。感想を交流し合う。
- ② 学習課題を設定し、学習の見直しを立てる。

第2次 「お手紙」のこだわりポイントを交流する。

- ③ 「お手紙」クイズを通しておおまかな内容をつかむ。
- ④ 登場人物の気持ちが伝わるようなこだわりポイントを探す。
- ⑤ がまくんが不幸せな気持ちで待っている場面のこだわりポイントを交流する。
- ⑥ かえるくんがかたつむりくんにお手紙を出す場面のこだわりポイントを交流する。
- ⑦ がまくんとかえるくんがお手紙について会話のやり取りをしている場面のこだわりポイントを交流

する。

- ⑧ 2人が幸せな気持ちで座っている場面のこだわりポイントを交流する。

第3次 音読劇をする。

- ⑨ 自分が選んでいる音読をしたい作品について登場人物の気持ちが伝わるようなこだわりポイントを探す。
- ⑩⑪ペアでこだわりポイントを話し、音読の練習をする。
- ⑫ グループ同士で音読を発表し、アドバイスする。
- ⑬ 音読を発表し、振り返りをする。

自分が物語の中でこだわって音読したいところ（登場人物の気持ちがよく表れているところ）を交流する。子どもたちの「ここを大切に音読したい」「自分だったらこんな風に読むよ」といった子どもたちの考えをもとに音読することで子どもたちの工夫あふれる音読が出来るのではないかと考えた。

2. 4. 教材との出会い

単元学習に入る前にアーノルド＝ローベル作「ふたりは」シリーズを読み聞かせした。読み聞かせしたのは「クッキー」「アイスクリーム」「なくしたボタン」の3つの話である。3話読み聞かせした時点で1番好きな作品を子どもたちに選ばせた。子どもたちは悩みながらも選んだ作品に自分の名札をつけた。「こだわり掲示板」と名づけた掲示板にお気に入りの作品を視覚化させ、子どもたちの作品に対する興味・関心を高めた。また、子どもたちには好きな作品が変わったら名札を貼りかえても良いと伝え、教室に読書コーナーを作った。（20作品から選りすぐった作品をこだわりのお話と名付けることにした。）そして、全20話の話を掲示すると朝の読書で「ふたりは」シリーズを読んだ子が早速名札を変えに来た。毎日、写真を撮って記録をしながらかわった子には理由を聞いたり、みんなの前で紹介したりするなどの活動をした。



(図1 好きな物語の視覚化)

こだわりのお話が変わった子は「親友って言葉が心に残ったから」「がまくんが面白いから」などと自分で作品を読み味わいながらお気に入りの話を決めていた。また、図書ボランティアの方々にも読み聞かせをしていただいた。中にはどんどん好きな作品に出合って名札の位置が変わったり、好きな作品がいくつもあって選ぶのに迷ったり、「やはりこの話が1番だ」となかなか変わらなかったりした子どももいた。どの子どもも楽しそうにお話を選んでいる姿を見ることが出来た。教室の一角には読書コーナーを作り朝の読書や休憩時間に手にとって作品を読めるようにした。休憩時には絵本を手にとって友達と楽しそうに音読をする姿も見られた。

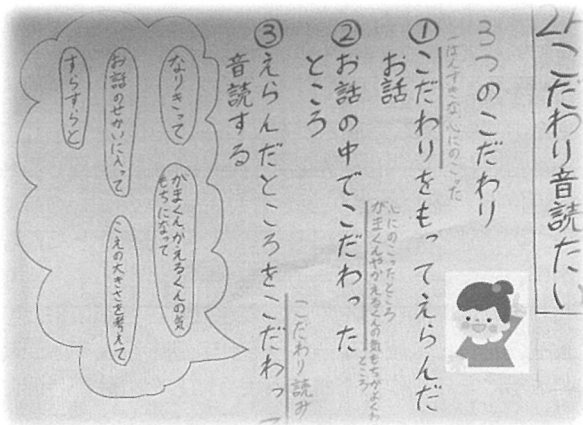
3. 学習の実態

3. 1. 単元のはじめ

単元の始めには「お手紙」という作品に興味をもち、音読を意識して学習に取り組むことが出来るように教師2人でがまくん、かえるくん役に分かれて音読を行った。音読の後には、心に残ったところや感想を交流した。がまくんとかえるくんの関係や物語の面白さに着目した子どもや最後の幸せになったというところが心に残ったと書いた子どももいた。1番多かったのはお手紙の内容がとても心に残ったという意見である。

3. 2. こだわりポイント

「お手紙」の第2時では何人かが音読した後に、「どうしたらもっと上手に音読できるか」と訊いてみた。子どもたちからは「がまくんやかえるくんになりきって」「お話の世界に入って」「すらすらと」「声の大きさを考えて」などの意見が出た。子どもたちから「もっと上手に読みたい」という想いが感じられた。すると一人の女の子が「こだわり音読をしてみてもいい？」とつぶやいたのでみんなの前で紹介してもらった。すると、違う子どもから「それやったらこだわって読むところを見つけたらいい」という発言が出た。そして、今度はまた違う子どもが「こだわりのところを工夫したらいい」と言った。一人のつぶやきから思考が繋がった瞬間であった。よって課題を「こだわったお話（お気に入り）でこだわったところをこだわって音読する」という「2Aこだわり音読たい」として音読をしていくことにした。（3つのこだわり）そして、授業では「お手紙」の中で自分がこだわって音読したいところをこだわりポイントとして交流していくことを確認した。



(図2 3つのこだわり)

本学級では本読みを毎日の宿題として習慣づけている。主に△(もう少し)・○(だいたいよい)・◎(たいへんよい)の三段階で保護者に聞いて頂き評価してもらうのだが、回数を重ねるごとに評価が上がり、一生懸命音読している姿が見られた。今回は、「2Aこだわり音読たい」という題で新しい音読カードを作った。音読やがまくん、かえるくんの心情を意識できるように項目を「声の大きさ」「すらすら」「がまくんになりきって」「はやさ・間のとり方」「こだわったところ」とした。保護者にも呼びかけ、本番として1回お家の人に聞いてもらうこととした。最初は△が多かったが、「◎をとりたい」「もう少し速さに気を付けて読むようにするよ」と子どもたちからももっと上手に読みたいという気持ちを感じられた。また、保護者のコメントからも「～ところがかえるくんにそっくりでした。」「がまくんになりきって読めていました」などと工夫して音読する姿も増えていった。保護者のコメントや成長したところは絶えず子どもたちに声をかけていくように心がけた。

3. 3. こだわりポイントの交流

子どもから出たこだわりが抽象的であったので子どもたちと一緒に定義付けをした。子どもたちからは「心に残ったところやがまくん、かえるくんの気持ちがよくわかる」として「こだわりポイント」と名前を付けた。そして、「お手紙」の中でこだわりポイントになりそうな候補に線を引いた。そのあと、自分が最も大事にしたい(こだわりたい)ところを選び、理由を書いて場面ごとに交流していった。以下、子どもたちが考えたこだわりポイントである。

- ・「今、一日のうちのかなしい時なんだ。つまり、お手紙をもつ時間なんだ。そうなるといつもぼく、とてもふしあわせな気持ちになるんだよ」
- ・「だって、ぼく、お手紙もらったことないんだもの」
- ・かえるくんは、大いそぎで家へ帰りました。えんぴつ

と紙を見つけました。紙に何か書きました。紙をふうとうに入れました。ふうとうにこう書きました。

- ・「今まで、だれも、お手紙くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ」
- ・「ばからしいこと、言うなよ」
- ・「だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだもの」
- ・そして、かえるくんからのお手紙を、がまくんにわたしました。お手紙をもらって、がまくんは、とてもよろこびました。
- ・『親愛なるがまがえるくん。ぼくは、きみがぼくの親友であることを、うれしく思っています。きみの親友、かえる』
- ・お手紙をもらって、がまくんは、とてもよろこびました。

第7時では、がまくんとかえるくんがお手紙について会話のやり取りをしている場面について学習した。

教師：こだわりポイントを紹介しましょう。

けんと：「だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだもの」のところです。(音読する)

教師：じゃあ同じ所を書いた子読んでみようか。

みか：(3人音読する)「出したんだもの」を強めに読みます。

教師：なぜかえるくんはがまくんにバラしてしまったのかな。

さとる：内緒だと(がまくんが)かなしいままだから。

ゆうと：でも、渡した方が嬉しいよ。

さくら：今までずっとかえるくんは(お手紙を出したことを)秘密にしている。がまくんを喜ばせたい。だからちょっと強く読んでみる。

こだわったところについて「○○だからわたしは～読む」というようにがまくんやかえるくんの立場になって考え、音読することが出来ていた。理由と共に交流し、何人かに音読してもらった活動を入れた。友達のこだわりポイントについても自分から「読みたい」と進んで音読する姿もあった。読み方が違ったり理由が違ったりする場合は子どもたちにその理由を訊いて本文に戻って考えた。

授業の最後には場面を音読し、友達同士で音読レベル(まちがえずに、声の強弱、なりきって)を星3段階で評価し合った。友達に評価してもらった後には「星3つもらった。」「○○くんのなりきり度がすごかったよ」という声があがった。



(図3 ペアで音読する)

4. 授業の考察

第7時では「お手紙」の中でがまくんの心情が大きく変化した「だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだもの」のところを中心として授業を行った。子どもたちのこだわりポイントを事前にみとり、授業の半ばで考えるつもりが始めの方で意見を出させてしまった。しかし、中心部分を始めに考えることで本文の前部分から登場人物の心情を考え、音読することが出来ていた。かえるくんが何回も窓からかたつむりくんが来るのを待っていることに着目することが出来たのである。よって今まで秘密にしていたけど、がまくんの言動に耐えきれなくなって言ってしまったという意見が授業をより深めることに繋がった。その反面、始めにこだわりポイントを前に貼って視覚化したのだが、子どもたちの意見を発表し、全て共有化することが出来なかった。教師がしっかり考えさせたいところとそうでないところの軽重をつけることができれば良かったと思う。また、こだわりポイントを紹介した後に子どもたちに音読してもらうのは、違いや自分が選んでいなくても友だちの意見を聞いて音読する姿があったのでとても良かったと感じる。しかし、授業の中でもっと多くの子どもたちに音読させることが出来れば良かった感じた。そうすることによって友達のこだわりポイントが自分の音読を向上させる1つの要素になりうるからである。どんどん音読させることによって「自分だった〇〇思ったから△△読んでみる」という部分をもっと交流させたかった。

5. 成果と課題

本研究の成果としては以下の点がある。まず自分が大事に音読したいところを明確にすることで子どもたちの意欲に繋げることが出来たことである。「自分だったらこのように音読する」ということについて根拠をしっかりと伝え合う活動がこだわりの音読に結びついた。

次に、子どもたちの音読への取り組みや工夫である。低学年の読むことの目標は「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること」であるが、登場人物のことを考えて音読の表現を工夫する姿が目立った。根拠をもつことが音読の工夫へと繋がったことは大きな成果であると考え。また、授業中、何人かに音読させることで、友達との音読を比べたり、本文に戻ってがまくんやかえるくんの心情をおさえたりすることが出来た。この活動は並行読書を活用することで「お手紙」以外のアーノルド＝ローベル作品にも目を向け、進んで読書をしたり、音読したりする姿を見ることが出来、多読にもつながった。

課題としては、子どもたちが考えたこだわりポイントを授業の中で交流しきれなかったところにある。子どもたちが音読するために大事だと思ったところを授業の冒頭で前に視覚化したのだが、登場人物の心情面の読み取りに時間がかかりすぎて取り上げることができなかったところもあった。子どもたちの意見を視覚化したところまでは良かったのだが、その後には共有化ができず、深めることが出来なかったのは大きな反省である。せつかく自分のこだわりに根拠をもって選んだからこそ、もっと授業の中で紹介させてあげたかった。また、途中何人かにこだわりポイントを音読してもらったが、もっと多くの子どもたちに音読をしてもらうことが重要だと感じた。それは、友達のこだわりポイントが音読上達のポイントになるからである。自分が選んでいないこだわりポイントでも自ら声に出して読むことで音読上達に繋がるという切実感をもっともたせることが出来たのではないかと思う。個人の意見がクラス全体の学習に繋がるよう指導が必要だと感じた。授業を振り返ってみてやはり個人の考えを全体で共有していくことの難しさを感じた。しかし、今回「2Aこだわり音読たい」として音読の上達を目指すのであれば「いただきポイント」として友だちのこだわりポイントが自分自身の音読上達にも繋がるというようにしていけばよいと思った。

参考文献

- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版社
- 水戸部修治 (2014) 小学校国語科学習指導案パーフェクトガイド1・2年 明治図書
- 水戸部修治・浮田真弓・細川太輔 (2015) 単元を貫く学習課題と言語活動 東洋出版社